特2 55
888

始

帝國圖書館藏

よろこびの　色とひかりと　家にみち
街々にみち　あめつちに満つ。
亡き父の　靈に見せまく　わが浸る
その喜びの　いろと光りと。

昭和四・五・十・内交
帝圖

向テ左ヨリ宮脇梅吉氏、藤井夫人、藤井晉次郎氏、
智惠子孃、石井豐七郎、

此稿は昭和三年十一月御大禮に參列の榮を記念すべく書たものですが、同年十二月、私は長崎控訴院長に轉補せられ、長途の移轉に引續き公務多忙、多くは汽車の中で筆を執たものです。從て推敲の暇もなく、さなきだに拙文、蕪雜を極めたものです。併し日が經つと忘れて仕舞ひますから、まとめたゞけです。
本書の表紙は、大饗第一日の儀に賜はつた歌舞解説の表の圖案色彩を其まゝ摸しました。實物は其上部に金色の御紋章があります。

昭和四年神武天皇祭　長崎に於て

著者

喜びの色と光りと

石井豐七郎謹記

前記

◇汽車が上野につくと、私は出迎に來て呉れた書記長の田村盛君に、今朝御發輦の鹵簿を拜することが出來ましたかときいて見ました。いふ迄もなく、十一月六日といふ此佳き日に、　天皇陛下には皇后陛下御同列で、曠古の御大禮を擧げさせらるべく京都に向はせられた筈なのです。田村君は私の勸めによつて、其盛觀を拜すべく昨日上京したので、私は當日上り急行で吉益檢事長と一緒に午後三時五十分上野に着たのです。田村君は、私に問はれて、せめて御羽車の御屋根でもと思つたのでしたが洵に申譯ありませんでした、と頭を掻くのでした。夫も其筈だとは愚息千尋の話で判りました。彼は叔父の加藤氏と共に昨日

の午後八時頃から丸ビル附近の路上に座して、ヤツと拜觀が出來たので、夜の十時頃は拜觀席に敷た蓆にモウ寸地もなく、おのづから席が定まつて、餘程遠くで交通遮斷をしたものと見えて、モウ誰も這入つて來るものはなかつたとの事でした。前夜の八時からけさの八時迄とは驚いた。夫にしても席を離れる必要の時はときくと、席が定まつて座つて居るのだから押し合もヘシ合ひもなし、十時間以上警官とにらみ合つて居るのだから顔も判つて來ると、悠々と丸ビルの方へ行くことも出來ました。其代り席に就く迄には可なり嚴重な身體檢査もされました。加藤の叔父さんは携帶の飴菓子までサラケ出して一々點檢を受けたといふのでした。田村君がイクラ脊が高くても午前五時頃に出かけて、十町も先きで交通を阻められては、御屋根も拜されぬ筈でした。

◇私は翌七日午前九時半、東京發御大禮參列員專用の增結車に乘て、同日午後七時四十三分京都に着たので、陛下は六日名古屋に御一泊、七日名古屋御發で同日午後三時に京都に御着になつたのであるが、京都に行て聞て見ると、京都では、六日の夕刻から、烏丸通の御通行筋の拜觀人席に、何萬といふ老幼士女が座り込んで、七日の午後まで動かなかつ

たといふので、更に更に驚きました。シカも六日の夜半から折あしく小雨が降り出して、敷て居た筵がダン／＼濡れて來るのに下駄や新聞紙で工夫して、夜を徹したといふことです。傳へ聞く所によると、私の知人のT氏の宅などでは、共本宅の前が拜觀に至極適して居るといふので、遠近の知り合が無慮三百人も來たので、臨時に三百人の辨當を二食提供したといふ話もあります。T氏は三百人は愚か三千人の辨當でも驚く人ではないが、思ひ設けぬ多人數の辨當には可なり困つたことでせう。ソウかと思ふと、流石は京都人だけあつて、膝掛や置炬燵は無論の事、宵の口には碁盤將棊盤まで擔ぎ出して、一つやりまホウといふ樣な手合もあつたとの事でした。さうした連中も雨には辟易したのでせうが、矢張席を去らずに翌日迄通したとはエライ事です。さる外國人の感想談として、自分は最近三條大橋に出來たといふ高山彥九郎の銅像をマダ見ないが、昭和の高山彥九郎を何萬人も見たと云ふ記事がありましたが、必しも外交的の御世辭ではないと思はれます。

　國を擧げて御大禮に集中し、京都に集中したのではあるが、大禮使の周到なる用意と鐵道當局の細心なる努力とによつて、專用列車、增結車といふのが都合よく運輸され

て、途中寸毫の苦情もなかつたことは嬉しくも有難いことでした。乗用の二十日も前に、仙臺に居て東京發專用車の座席をきめて貰ふことも出來ました。專用乘車券の外に特製の記念荷札まで豫じめ配付されて、重なる荷物は數日前に託送することが出來ました。仙臺から上野までは普通の急行車でしたが、例年にない暖かな日和で、花より美しい沿線の山の紅葉さへ鐵道當局のお蔭かと思はれました。那須岳の噴烟がいつになく、ゆるく、高く天に沖するのを見ては、此夏三本鎗岳に御登攀の御途すがら越へさせられた　至尊の爲め、今度の御儀式をほぎ奉るかにも見えました。七日の朝の特急に增結した一等專用車の前のホームには、大禮服の鞄やシルクハツトのケースが山を成して、此多數の參列員が數日數回にわたつて如何に輸送されるかと餘計な心配までしたのでしたが、何れも車內に寛ろぐことを得て珍らしく暖かく霞んだ樣な外の景色を眺めては御大典日和だと喜ぶのでした。

◇富士の秀容は薄雲に隱れて、其胸のあたりのほの見える丈でしたが、夫さへけふは奥床しきものゝ如く、辨天島の鷗は金泥の稍鈍き屏風の繪の樣でした。細雨窓に觸れて朧ろに

曇るも、むしろ長閑でしたが、列車名古屋につくと、舊知の驛長がホームに居て、昨日は中分ない日和でしたが、本日御發輦の時は折悪しく驟雨でしたと聞て、聊か不安を覺え、京都はどうでしたらうと問ひ返すのでした。併し京都着の時は其直前迄降つて居た雨が不思議にも霽れたといふことですとの元氣な答で、ドノ位安心もしドノ位喜んだことでせう。御卽位の大禮は、人間の儀式ではなくて神事であるよと、獨語するのでした。

◇名古屋では、一入思ひ出の多い高橋前名古屋控訴院長も、同じく名古屋に永く居た吉益檢事長も同車して居るので、何れも金の鯱鉾を我ものゝ樣に、田村書記長や小野監督書記に見せやうとしたのでしたが、暮色漸く深くて、御自慢の寶物入の藏の鍵が下りたといふ休でした。併し城頭高き、明星の樣な光は、御駐輦の榮を誇るものゝ如く、過ぐる所の各驛に、奉祝とりどりのイルミネーションは、星座地に移つて祝ひの莚を開ける如く、美しいよりは嬉しいものでした。

◇數時間前に晴れの鹵簿を迎へた京都の玄關の氣分は、植込の茂りを過ぎて亂菊の花壇に入つた樣で、混雜を極めた中に喜びの色と光が滿ち滿ちて居ました。ホームには今度の宿

をして呉れる藤井晉次郎氏を始め舊知の諸君が、忙しいのに迎へて呉れて、ヤー〳〵といふ外に他人行儀の挨拶もないのが一入なつかしいものでした。　鳳輦御着の時丈霽れたといふ空は、夕刻から又小雨になつたらしいのでしたが、夫が又亂菊に霧を吹た樣で、淸らかな濕ひであり、京都風の滿街飾は、私達を友禪縮緬の夜具でフウワリと包む樣に思はれました。私は、夢の樣に、自動車の中から四條の通りを顧みがちに、六角通堀川の藤井氏の宅につくと、まるで家の人が旅から還て來たかの樣に歡迎されるので、こちらもいゝ氣になつて旅から還て來たかの樣に遠慮なく上り込むのでしたが、夫にしては、室内の調度といひ、設備といひ、あまりに僭上の沙汰で、さなきだに小さな身軀を大きな座布團の上に縮めるのでした。

◇藤井君が京都にも珍らしい任俠の篤志家であることは、今では京阪殊に司法部で有名なものですが、今度の御大禮には是非同宅に私を泊めると、豫てからの厚意なので、私は其厚意に甘へた譯なのですが、部屋の中は申すに及ばず、廊下に出ても洗面所に行ても、風呂に浴しても食卓に着ても、其歎待の用意が私の樣なボンヤリにも一々看取出來る位です

から、京都一流の旅館はおろか、何處に泊ても、かうした氣分に浸ることは出來ないと思ひました。夫ですから滯洛中の自動車に付ては何人も最初は苦慮したのですが、私は愈自動車に困れば藤井君に賴むから心配はないと涼しい顏をして居たものです。藤井君といふ人は、京都に自動車がなくなれば新たに買ふて來ても提供する位の仕事をすると、得意で人にも話した程です。同君に會つて其話をしたら、果せる哉、笑うて頷づかれるのでした。主人ばかりか、夫人令孃召使の人達まで、氣をつけて下さるのに、シミ〴〵有難がつて居たのですが、親切は藤井家ばかりではありませんでした。私は其翌日、兎も角も私の舊巣たる裁判所に往訪すると、是は又想像以上の取込で、一寸辨當を注文しても容易に間に合はず、一時間も經つてから持て來た膳には箸がないと云ふ具合で、生れて初めて飯匙をスプーン代りに使はざるを得なかつた位です。辨當以上に配給の面倒な自動車の振割に至ては中々意の如くなる筈なく、係りの苦心は實に一ト通りではない樣でした。夫を馴染の顏の遠慮もなく、彼是云ふて後になつて氣の毒に思ふた程ですが、夫でもイヤな顏一つ見せず、奔走して呉れるのには、心から感謝せずには居られませんでした。

◇私は、かうした懇切に浴し溫情に浸りつゝ、先づ京都御所に　天機を奉伺し、夫から宮殿下の各御旅館に御伺ひする爲め、洛北から東山通にかけて、自動車を驅り、伏見に走つて　桃山御陵に參拜したのですが、細雨しば〳〵過ぎて松を染め山をぼかしたるさへ興深きに、到るところの街路店頭、彩り美しき裝ひを凝らせる中を行く心境は、まことに譬へ方なきものでありました。かくて夕靄に包まれて宿に歸ると、更に暖かな靄を作つて風呂が客を待て居る。我肌の赤らめるを撫でつゝ、部屋に戻れば、炷香靜なる處茗味芳ばしく喫烟一番すれば、閑雲頭上にたなびく、私はかうして御大儀禮の日を待て居るのでした。

賢所大前の御儀
紫宸殿の御儀

◇待ちに待た十一月十日が來ました。國中の生きとし生けるもの空飛ぶ鳥さへ地に立つ樹々さへ、喜びの聲を上げ、愛で度色を示すかに思はるゝ日が來ました。總身の肉は何となく引締つて脈打つ毎に血の流れが澄んで行くかにも感ずる朝となりました。六日以來の天候は春雨の樣にけぶつて、庭の芝生を萠やす氣かとも思はれたのでしたが、けさは清くも霽れて、地上のあらゆる穢れを洗ふたもの丶如く、氣溫は低下して磨き上げた大理石の面に觸れるやうな氣分でした。まだほの暗い午前五時に起き出した私は、いつもの如く冷水で肌を拭くのでしたが、けふは格別、冷たく、淸く、尊とい水の樣な氣がしました。身ぬちまで淨めて宿の主人並に同宿の宮脇埼玉縣知事――今の千葉縣知事――と共に朝餉の膳に向ひましたが、口々に御大典日和だと壽ぐ外に話題はありませんでした。

◇私は早くも大禮の服裝して待ては居たもの丶、午前八時二十分迄に第二朝集所へといふのに七時四十分に迎への自動車は可なり早い。此際用意された自動車の運轉手は東京から

來たので京都の地理を知らないからとあつて、特に早くから出勤せしめた上に、私に案内役をも兼ねさせやうといふ車輛係の苦心の結果だといふ事でした。私が門を出ると近所の子供やお家はんまで出て來て見物されるには驚きました。途中も同樣ですから狹い街では荷車を片づけたり自轉車を運んだりして通して呉れるのでした。掃き清め洗ひ清めた市街は、大典に因めるとり〴〵の色と形とに飾られて、就中四條通烏丸通は參列員の爲め、聖なる殿堂の廣廊と化した樣です。

◇私は柳馬場の森田三郎氏邸に滯留の三木東京檢事長をお誘ひして、丸太町通に出ると、人道一杯に人が立て居ます。參內の自動車の行列を御式場の延長と見てか、其往き來の自動車を送迎して居るのです。堺町御門を入ると、疎らに立てた柵の樣に警官が居て自動車を流し込む、流し入れられた車は建禮門の右、御所の東側に設けられた朝集所の車寄せで止まる。夫が第二朝集所で、其北に饗宴場が設けられ、饗宴場の左側御所との間に第一朝集所が作られてあります。宮中席次第一階の大勳位以下勳一等といふ參列者は第一朝集所に其以外は第二朝集所に參入することになつて居ます。第二朝集所には第二乃至第九の休

所があつて、是亦宮中席次によつて豫じめ席を定めてあつて、各自の持てる參入券に其卓から位地までチヤンと記してあるので、何等マゴつくことなく私は第二休所の指定の席に落つくことが出來ました。清楚な白木の建築で明るい感じのする處へ、文官の大禮服が白下衣白袴ですから何となく陽氣であり、スチームのお蔭で、輕く暖い卓を圍みながら、其處此處に舊知の人達が互に久濶を叙する高笑ひが滿室を春めかすのでした。

　式部職の注意で參入の用意をすると、豫定の時刻分秒を違へず、八時四十五分に參入の爲め二列行進を始め、建春門をすぎて、春興殿の南門に行くと、衛士の裝ひいかめしく門側に並んで居る、其所から二列が左右に分れて各幄舍に導かれます。私は向て右の幄舍に着席したのですが、左右幄舍の間の御庭には神樂舍があつて、正面は即ち春興殿、去七日移御の賢所たることは云ふまでもありません。神樂舍と幄舍との間には、珠を細かに碎いた樣な砂が盛られて、櫛を現いた樣に筋つけられて居ます。其所に威儀本位と申すか、弓矢の武士姿十人に次ぎて、太刀、弓、胡籙、鉾、楯の捧持者黑、赤、縹いろの袍を着て都合二十人、其次に鉦、皷各三臺と其司さ人が何れも床几

に腰を下ろして、人形の如くに身動きもせず向ひ側も同じ事です。

◇私共が幄舍に着席を終つた頃、九時五分から參進を始めた第一朝集所の參列員は、東鄉大勳位を先頭として續々やつて來て、私達の前の椅子につく、伊東良馨子や淺野長勳侯が、老軀を宮內官に扶けられて、晴れの御奉公をと、靜かに足を運ぶ。袿袴の令夫人達が着馴れぬ服裝穿き馴れぬ履で、後れ勝ちなるを御主人が氣にしながら進んで來る。各國の大使使節並に夫人達が、各自國の禮裝とり〱なるは當然であるが、ムク〱した白い毛皮に金髮をのせた樣なのもあり、ストツキングの間に小さな化粧廻しをブラ下げた樣なのもあるのが、彼此お互樣に珍らしいものでした。

◇緊張による咳拂ひがアチコチに靜肅を破るとき奏樂舍から、なだらかな聲が流れて笙の音と和琴のしらべが相和してゆるやかに伸びると、神殿の擬寶珠の間に跪座して居た衣冠の人が動き出して開扉を行ひ、つぎ〱に饌をたてまつるが、俗間の御三寶ではなく、折敷を用ひらるゝ、此間に諸員は鉦一聲起立、皷一聲復床をやること兩三度、三たび目の鉦の聲して　陛下には侍從の前行、純白の御袍立纓の御冠で出御あらせられ、各皇族殿下

首相以下の各官が衣冠單で御供して廻廊を練て、正面の御簾を潜つて、拜殿と申すべき中へ跪座されましたが、其神々しさ何と申上樣もなく、正に神の御子じやと仰ぎ奉るのでした。稍距離をとらせられて、十二單の御裝ひすが〱しき上に御髮を長く垂れ給ひ、御裳を後に持たせて、靜かに廻廊を進ませられます。いふ迄もなく　皇后陛下で、其直後に、最近嫁がせられた許りの　秩父宮妃勢津子殿下が續かれます。無論左右幄舍の何處にか、同妃殿下の御兩親の松平恒雄子同令夫人も居られる筈ですが、胸に湧く感激をいかに抑へて居られるだらうかなどゝも考へるのでした。さうした想像に眼を熱くして居ると、膝から下が急に寒くなつて來ました。風もないのですが、全身が固くなつて震へる程寒い。帽子を膝にひきつけて、震へを抑へて居るの外ないのでした。頓て、九重の雲深きといふを如實に味はれる樣な、珠を磨るのかと思ふ音がかすかに聞えて、耳をすますと、其音が益遠く去るが如く、愈近く迫るが如くでもある。九條掌典長とやらんが鳴らし奉る金鈴だなと始めてうなづかれるのでした。夫が歇むと、暫くは森として何事がおはすとも判らない、此間に　陛下の御告文があつたものと拜察するのでした。果せる哉　陛下にはやがて神殿

を出でさせられて前の如く順次廻廊から御退出になります。鉦一聲皷一聲が幾度かくり返され、神樂舍から暢やかな歌が立上る烟の樣に靡いて御式が濟みました。ヤツと我に還つて式部官に導かれつゝ、元の休所に戻ると十時半。卓上には折詰の辨當が列べられてあります。少し早いが一同夫を頂戴する。白木造りの見事な朝集所が、一日にして煤黑に染められはしまいかと思ふ許りに、煙草の烟が室に漲ぎるのでした。

◇午後一時五十分から、紫宸殿の御儀に列すべく前の樣に二列行進が始まりました。賢所の往復で、幾分か見當がついたものゝ、今次の御儀式中一番重要なと思ふとき、一層身が固くなるのでした。春興殿の南門をすぎて、紫宸殿の正面建禮門の內側なる承明門に行くと、門の兩側に武裝の衛士が數名居ります。此所から二列は左石に分れて、右は日華門側の廻廊に、左は月華門側の夫に整列するので、後に續く參列員は、後ろへ〳〵と結局八列に列ぶのでした。視線を落すと、靴の兩側敷物の上に鋲が打つてあつて夫が一人宛の豫定位置であることも知れ、大禮使の苦心が讀まれました。肩を摇する隙もないけれども、私

は日華門に近い最前列なので、南庭の全景を觀取することが出來るのを何よりの仕合せとして、模型圖其儘取つけられた樣に居並ぶ威儀のものゝ捧持者や鉦皷やを見て居ると、其間に、宮中席次第二階以下奏任總代迄が全部廻廊に詰める。月華門の北の方には、外交團同夫人連が並ぶ、時を移さず老體の淺野侯爵、伊東元帥等式部職に扶けられて、紫宸殿の東階から喘ぎ〳〵昇られる。例の東郷元帥を先頭として親任以上袿袴の人達が、同じ階段に續いて、紫宸殿の南側に侍立の位置をとられ、衣冠束帶のつかさ達も夫々定めの位置に着て、三千の參列員は全く刻まれたものゝ樣になりました。

◇動いて居るものは、五色の旛旐だけで、纛旛萬歲旛などは重々しく空から垂下して默だして居ます。關根博士の書かれたものには、十五間に二十一間とあつた樣に覺えますが、私の目で測つた處では二十間に二十五間もありませう。其滿庭が、水を打た樣だと思ふと、一抹の雲が萬歲旛の上空に現はれて、時雨が霧の樣に散りました。と見ると、夫は實に一二分間で、晩秋の陽が承明門の彼方からさして、あゝ、何たる神秘ぞ、雲は倏ちに五色に彩られました。瑞雲と云ふを詩文にも誦し現に紫宸殿の廂の下に吊られてある帽額（モカウ）といふ

幕の模様にも見てあるものゝ、今、まのあたり、五色の彩雲を紫宸殿の南庭に見るとは。偶然とは思はれません。丁度其時です。樹てられた鉾について居る小旗の竿が、風に揺れて、實に不思議な音をして鳴りました。私は妙な音だと耳を傾けて感に入りました。ラヂオの放送で一種異様の音がしたといふは正に夫です。

恥しい話ですが私は纛旛といふ譯も知りませんでしたが、其後十一日に都踊に招かれた時、舞踊の番組に持物纛とあるので、ハテ何を持て來るかと注意して居ると、舞子が旛の首について居る様な金絲の房の垂下してるものを持て來たのでアレかと判りました。宅に歸て調べて見て、支那でも日本でも古へは獸毛を以て作つたが近世は苧を黒く染めて作り、今は絹糸に金箔を置くといふことが判り、大纛を進めるといふいはれも判つたことゝです。

私自身の恥をかく序に、日本人の恥?をかゝねばならんことを私は遺憾とします。新聞などには、シバブキ一つするものもないと書きますが、實は御大禮の様な森厳な御式に列すると、私共の仲間が競争して咳拂ひをすることとです。此位耳障りのものはな

いが、何とか夫を耐へる習慣は作れないものか。と私は豫て思つて居たのですが、今度此際益其感を深うしました。咳一咳と云ひ、謦咳に接するとも云ふから、東洋では昔からソウしたものか、私は小學校あたりから、君が代の合唱の前や勅語捧讀の後に、盛に咳をしない様に教へて貰ひたいと思ひます。

◇鉾の竿が鳴りを靜めたと思ふと、カ・カーンと云ふ鉦の音が澄み切つた空に響き、遙かに輝く高御座の後ろから、「ケーヒ」と云ふ聲が滿庭のしゞまを破つて、六千の耳から肉に沁み入り、頭は自づから低うなりました。云ふ迄もなく　至尊の出御で、續いて　皇后陛下は向て右の御帳臺に上らせられました。二人の侍從が　高御座の東西兩階から、二人の女官は　御帳臺の左右から、何れも靜々と上つて、紫模様の美しい御帳を八文字にかゝげると、畏くも　兩陛下立御あり、粧はせ給ふた日月を仰ぐの心地と云ふより外ありません。鉦一聲、諸員が意義深い最敬禮を捧げると、續いて黒袍卷纓の田中首相が、運ぶ足も重々しく西の階段を下つて、右近の橘の側から進んで南階の正面に直立する、其時鉦聲いみじく諸員が一齊に首を垂れました。

◇何やら巻いた紙を　陛下に捧げたけはひがしました。併し何と云ふても斜に十數間を隔てゝ居る。御殿の御屋根の傾斜が高御座の上半を覆ひ參らしてある。其御殿が又十八級の高さを持て居るのですから、午前の賢所大前の御儀のやうに、かすかにだも玉の御聲を耳にし得べしとは、夢思ひ設けなかつたのに、是は又、神の御言か肉聲か、

朕惟フニ我　皇祖　皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經綸シ

國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ

と云ふ御言葉が朗々と響き初めたのに、驚いたものは私ばかりではない樣でした。其內、といふが耳に入ると、何とはなしに熱い汁が涙管から鼻に傳はつて流れます。是はシタリ音させてはと飲み込まうとすると、隣から隣へ鼻涕を啜る音がします。各國にも夫々英明の君主大統領が居られるが、かくも堂々たる玉音を聞かれることがあるかと、參列の外國の人達に問ふて見たいと、勅語の終りにホツト息づいて、コンなことも考へました。

◇午後三時を期して全國一齊に萬歲を唱へやうといふのだから、かうなると秒を爭ふ。田中總理は鞠躬如として南階を上る。我も人も腕の時計を見る。總理は　高御座の御前に立

つと紙を展べて、極度の莊重さを保つて壽詞を奏する、一語は一語より高く、其音聲は正に赤誠と共に我等の肺腑より迸る聲を蒐めたとも聞えるので滿足しました。唯壽詞が可なり長い。奏し終てすぐに階段を降らば恰も三時かと時計を見て居ると、年月日に續いて官職勳等功爵位が又相當長い。階段を下り終るとき殘す所は何秒と云ふことになつた。橘の樹蔭に電鈴を取つけて祝砲を打たせる用意もあつて、豫行練習も重ねたかに聞て居るだけ氣の揉めることでしたが、首相が後退今一步萬歲旛の下につかんとする刹那、方に三時。待兼ねた歡びの聲か、北の方相國寺の方面より、萬歲の聲が響き出す、かと思ふと下立賣の方面も之に和して、遙かに祝砲の音さへ聞えましたが、此時遲し、一世一代の大音聲は萬歲旛の下から溢れて、三千の諸員は一齊に唱和する。其聲は大地より天に達しました。國を擧て七千萬は云ふも更なり、地上に生ける限り、草も木も、莖より幹より聲をあげて萬歲を祝福するかと思ふとき、紫宸殿の御屋根は全く人界の夫とは見えませんでした。

私は如何にして今日を記念しやうかと兎角の名案もなく、朝集所から退出するとすぐに、豫て信頼せる堀寫眞館に自動車を驅ると、沿道には着飾つた京乙女まで堵を爲し

て、自動車の行列を物見して居るのでした。宿に歸つて、服を着かへて郵便局に行て見ると、記念葉書の包み紙が廣い土間を埋めて居る。一時間前に交通巡査をして群衆を退けさせて自動車を進ませた私も、今度は葉書の包み紙を踏み〳〵局員に叱られながら、行列の中で押されて居ると、スタンプを押す係員まで、京都は流石に念入りで、暇の入ること夥しい。

○

肅として水な打つたる大前の、砂一つだにいかめしき哉。

○

白雲の衣な被つきて神の御子、賢所にいま現(げん)じ玉へり。

○

古しへの樂の器の夫らしく、小錦旛は鉾(ほこ)にふれて鳴る。

○

畏しさに涙落しぬ、神の御聲あまりに淸く耳に入る時。

○

崇嚴の極みの中ゆ陽(ひ)の照りて、歡びの聲大地より湧く。

‖賢所御神樂の御儀‖

昨十日は、私にとつて終生忘れられない、全國的に國民が永く忘る可らざる聖日であつた許りでなく、畏敬する私の宿の主人藤井氏にとつて更に一大祝日であつたことが私にはこよなき喜びでした。藤井氏が社會事業功勞者として、御大典に際し、何等か表彰の光榮を荷はれるではないか、是非ソウあつて欲しいと、實は私の期待した所でしたが、夫が又何たる仕合せか、私が紫宸殿の御儀から退出して來ると、沈重なる藤井君が珍らしくいそ〳〵と梯子段を上つて來て、喜んで呉れ、自分の努力が畏くも、

天聽に達して勳六等に叙せられたといふのです。明日午後一時府知事から其傳達があると通知が來ましたと告げるのでした。私は宮脇知事と共に衷心から祝意を表すると、藤井君は勿論、夫人も令嬢もお蔭でと、つゝましやかに謝意を表すると同時に、平素藤井君の勋績を敬重し、同君の事業を推奬して居る知己にむけて、其報告と感謝の旨の電報何百通かを發するといふ騷ぎです。今日は愈其傳達があるといふので、燕

尾服や紺綬藍綬の褒章佩用の世話迄焼て、私は午後二時には賢所御神樂の儀に參列すべく、迎への自動車で出て行きました。けふは黒の下衣黒の洋袴です。

◇私は例によつて、三木檢事長を御誘ひすべく柳馬塲の森田氏方に立寄ると、此處には、廣島の今村院長南谷檢事長も同宿されて居るのですが、岡山の新聞記者がはる〴〵とやつて來て、今し廣島の兩長官の參列振を撮影する處だと云ふことで、序ながら三木檢事長も私も其中に加はれといふので、餘儀なく小堀遠州の作といふ由緒ある庭をバックにした私の貧弱な影像まで岡山に持て行かれました。今度の御大禮に付て、體力を超越した勤勉努力は、申すも畏けれども　上御一人を始めとし、全國的ではあるが、新聞記者の奮勵は、紙面を通じて之を推測するだけで、他に傳へるものこそなけれ、實に絶大なものと云ふて可なりと思ふ。而も其椽の下の力持に對して小言らしいことをいふものもない處に、云はん方なき喜びと誇りがある樣な氣がするのでした。

◇午後二時五十分、私達は昨日の例によつて第二朝集所内の休所に行きますと、誰も彼も昨日の二大御儀に就て話し合ふのでしたが、　陛下の勅語の御立派さを稱へ奉らないもの

はありませんでした。玉音朗々の常套語では單なる御世辭を申上げる樣で物足りないけれども、之を傳ふるにふさはしい言葉もないといふ說も出ました。私はひそかに、神の御聲だ〳〵と獨斷するのでした。

◇さうかうする內三時四十分になる。賢所參進とあつて昨日よりは稍上手な足並で、春興殿前の幄舍に進んで着席を終ると、第一朝集所の參列員が續いて參入して前面の椅子につく。

袿袴の方々の內には、豫て面識ある令夫人もあるのであるが、服裝が違ふので一寸判らないなどの私語も出ます。中にも和仁東京控訴院長の直後は同夫人であらうが、お年も若やぎ全然別人の樣だといふ人があり、袿袴を召すとソゥ見えるのだと說明する人もありました。何事も解決未了では濟まされない我吉益檢事長が都踊に招待の席で、直接同院長に質問を試みると、全然別人に見えたも道理、夫は近衞大禮使長官夫人だよといふ事でした。ドゥもソゥでせうは後の笑話ですが、幄舍では中々緊張したものでした。

◇神殿の御裝飾等は別に變つた處はないが、けふは神樂舍に三方幔幕を垂れてあります。聞けば、此所で御神樂を奏するので、午後六時頃から鷄鳴の頃迄、其間に勅封の秘曲もかなで奉るのだそうです。されば、神殿に向へる正面丈が開いてあります。神樂舍の兩側に威儀本位の人達は居らず、白川砂利が一入美しくかきならされてあります。

◇日かげ斜めに神殿の擬寶珠を照らす四時十五分、神殿の右下の奏樂舍から、神代ならではと思はるゝ歌の聲が岩屋の中からでも響く樣に聞え、笏柏子の音が神韻を傳へると、神殿の御簾がかゝげられて、つぎ〳〵に神饌を供へ奉り、何時とはなしに奏樂がしづまると、九條掌典長が神前に進んで祝詞を奏した樣でした。愈出御と待ち奉るほど　陛下には式部長官、宮內大臣の前行で、宣陽殿から御出御になりました。大前の御儀には雪白の御袍でしたが、けふは帶黃色の御袍なので、麒麟や鳳凰の織出し模樣は定かでないが、黃櫨染の御袍とはあの御召物と明らかに拜されました。侍從長以下御供仰せつけられて內陣に入御になると、各宮殿下も續いて御着席、時を移さず、例の金玉を觸れる樣な嚴かな音が幽かに耳に入る。幾十回とも數へ得られませんが、其間に御拜禮の事があつたと見えて　陛下

御退出になると、今度は眞紅と草色の織模様なる御五衣に御小袿御長袴を召され、御髮を長く御袴まで垂れられて　皇后陛下が廻廊を進まれます。供奉の女官と共に神殿に入らせられる後から、　秩父宮妃殿下を始め各宮妃殿下が何れも紅紫とり〴〵の五衣に漆黒の絹を束ねた様な髮を曳き、御袴を履んで練られる光景は、美しいと申さうや、尊といと申さうや、眞に何がしの式部の昔を描いた極彩色の繪であります。如何なる名手も寫し得ざる大作であります。私共は畏しさを忘れて見とれて居ました。

◇かくて　皇后陛下の御參拜がすむと、一同は順次退出を許されたのですが、御神樂は之から徹宵行はれる、私達は市の招待で都踊の見物に出かけたのですが　兩陛下とも、神樂舍の歌曲の終るまでは御休みにはならぬらしいと承はつては、遊覽氣分にはなれず、ソコ〳〵に歌舞練場を出て歸るのでしたが、市中は又思ひきつて靜かといはんよりは、嚴肅なもので、緊張、警戒、全市事なきを期する空氣に滿ちて居るのを見ました。

○

五衣（いつゝきぬ）、緑の髮を曳き給ふ、繪は動くなり神殿の欄（らん）。

○

神殿の奥のおくにて、かそかにも、珠を磨るかに金鈴の鳴る。

大嘗宮の御儀

◇御大禮中最重の御式として、徹夜の御祀りとして、數月前から、無事に奉仕すべく、攝生にも意を用ひた丈に、十四日は朝からいろ〳〵の用意が中々大袈裟であります。宮脇君は湯も茶も飲まずに寢て居られます。私は午後になつて床に就て見たが眠れもせず、又起き出して眞綿を靴下の間に入れたり、白金懷爐に火を点して見たりして居ると、三時には風呂の用意が出來たと云ふ、早速齋戒沐浴して出ると、藤井君が特に注文した餅を座敷に持出して、乃公親ら炙つて私共にすゝめるのでした。夜前から之に限るといふ決議に基いたので、無論鹽氣も湯水も用ひない、唯砂糖を添へて空腹を凌ぐ程度に喫ふ。

◇天氣は曇つて居るけれども、夜に入て冴えたら夫は寒からう　陛下の御勤行に比ぶれば何でもないことであるが、火の氣もない吹きさらしの幄舎では、中々きつからうと云ふので、下衣の中へは眞綿を脊負ひ込み、午後四時頃出かけると、けふは午後六時から一切の鳴物を廢し、電車も自動車も徐行して警鈴をさへ鳴らさぬ筈と聞きましたが、日の中から

市中は靜粛共ものでありました。

自動車は堺町御門から右に仙洞御所に設けられた朝集所に着いて休所に案内されると是はいかな事、溫かい事夥しい。無論朝集所にはスチームの設備があるが、今日は蒸氣を通してはないのに特別溫かいので、參列者が增して來るに從つてソロ〳〵苦しくなる。窓を開けて外氣を吸ふてるのもあれば、冷たい煖房器に手を觸れて冷やして居るのもある。聞けば概ね眞綿を脊負ひ、懷爐を腹にして居るのであるが、大禮服の事とて今更取出すことも出來ないといふ告白である。廊下で牧野大審院長に遇ふたら、君が白金懷爐をすゝめるので態々買ふて入れて來たら熱くて仕樣がないと小言を仰しやる。併し貴方ばかりではない、熱かつたら取出すまでの事ですといふと、今更出すのは困難だし、出しても置き場に困る。況して眞綿はドウすることも出來ないと云はれる、御尤もである。御尤もなので みんな 困つて 居られると笑つたことです。マダ〳〵可笑しいことは、幄舎參入前に、係員から注意があつて何れも手洗所に行くのですが、出て來る人々が、行ては見たが排泄すべき液體はないと云ふ事でした。

◇六時十五分、愈幄舍に參入することになりました。昨日來の雨で淨められた砂が、御紋章入の高張提灯を通して照らす灯によつて、紫水晶の粉でも蒔いた樣、白木の神門は、白蠟を磨いたかの樣です。神門の內側には、白幣を纒うた樣な衛士がつゝましく庭燎（ニハビ）を焚いて居る、赤々と燃ゆる火が炬手（タキテ）の半面を朱（アケ）に染めて神秘さが一入身に泌みる。和田英作、下村觀山など云ふ畵伯が願ひ出て、奉仕して居ると承知して居るが、彼自身が千古の名畵となつて居るかと顧み勝ちに、私達は右方の幄舍に進みました。此御式に參列の榮を有する者は七百三十餘名と承りましたが、老人や婦人には拜辭したものもある樣子で左右幄舍に各三百五十位と數へられました。幄舍は三方板仕切り表側は杉皮で蔽はれてる樣でした。磨硝子を張た白木の燈籠から流るゝ朧月の樣な淡い光を浴びながら席に着て見まはすと正面には皇族幄舍がありますが、神事を營ませらるゝ御殿の方は暗くて何も見えません。

私共は十七日の午前中、特に許されて、紫宸殿を始め大甞宮を拜觀し、初めて當夜の位置を知つた位であります。仙洞御所は人も知る如く今は建物とてはない幽邃な御庭ですが、大甞宮は其處に御造營になつたので周圍は板垣をめぐらし、內側には柴垣を作つて四方に櫟の皮附の神門を設けられ、其中に悠紀主基の兩殿があります。殿舍と申しても皮附の黑木造で金物は勿論用ひられず繩で結んで組合し壁や扉は筵を張り床は簀子の至て御粗末なものです。帳殿と申しても九尺四方位のさゝやかなもの、當夜

陛下には御徒跣で此御廊を渡らせられたかと思ふて襟を正うした事です。柴垣の所々に小さな榊の枝らしいものが挿してありましたが、之は松尾神社から取つて來てさした椎の若枝だと云ふ事です。一種の飾りとすればいかにも神代らしいことです。膳舍と申すも柏の葉で造つた食器に御饌を盛るのでカシワヤといふとか。建國の古に還れと云ふ神の聲が萱葺の御屋根の邊から洩れるやうでした。

◇遠くは見えないから、尙も幄舍の中を見まはすと、床にはリノリームが張つて在つて、此處にもスチームの設けがあり、寒かつたら長椅子の下から暖める用意がしてあるのは有難いことでした。併し今夜は其必要もない程暖かいのは尙更有難いと小聲で話して居ると、奥の方に脂燭の炎が見える、小忌衣（オミゴロモ）を着た典儀官がサク〳〵と砂を踏んで奥の方へ行く、其奥の方から、アー〳〵と云ふ樣に長く引く神樂歌が御屋根の上に漂ふと、庭燎が一しき

り燃えて、淡墨に描いた松の茂りがほのかに浮き出す。此間に稻春歌があつて、女官の稻春の神事もあることかと、自然に神の代に引き入れられるやうでした。

◇あたりは森として、一切の音は靜まり、動くものは脂燭の炎のみ。懷中電燈の合圖で諸員は起立する。今ぞ　陛下の渡御か。小野内掌典が天鈿女命共まゝの姿で宇氣槽（ウキフチ）の上に昇り、鉾で底を突くこと十合といふも今か。幽かに赤い空のけはいも岩戸の昔さへ偲ばれます、次て最敬禮の合圖がある。御親祭であらう。默して瞑して禱りを捧げ、合圖によつて席に復すると、うつとりと神境に入るのでした。　至尊も一世一代におはす。私達も一生一代の氣分、神靈と神の御子と、其御子の臣民とが、何とはなしに一體となつて、諸慾を滅し、雜念を絕して、唯神の御國あるを知るのみでした。

　幾たびかの合圖の後、前列が起つて最敬禮をして靜かに横に出て行く。私も同じ様にして神門を出て、始めて人間たる自分を見出すのでした。朝集所に戻て見ると九時二十分、卓には小夜食の膳が並んで居る。皿、鉢、盞何れも菊模様の磁器で、五目の御飯から汁に至る迄、まことに適度な溫かさ、芳醇なる清酒の燗はもとより格別であつ

たらしいが、是からの御式に失態あつてはとの懸念から流石に皆控へ目です。

食事の後廊下に出て見ると、相變らず懷爐に惱まされてる人達が、窓側で凉を納れながら欵談をしたり、久濶を叙したりして居る。袿袴の夫人達が手巾の入れどころなどを研究してるのもある。前法相江木翼氏が懷爐を取出して手に持て歩いてるのや、大兵肥滿の某二千石が洗面所の水をガブ〳〵飲んで居るなどは傑作でした。

◇主基殿の御祭りは、午前一時からと云ふので、零時十分にもとの幄舍に導かれました。丁度參入を終つた頃、サラ〳〵と音がするので、外を見ると雨です。淨めの雨です。烏羽玉の闇を縫うて庭燎の炎は紅を流すかにほのめく。小忌衣の白いのが夜半に音なふ驚かなんぞのやうに動けども、ソヨとの風もなくして老松の枝は黒木もて刻める瑞龍の形である。共老龍の吐く息でもあるか、縹渺たる神韻が遠く遠く聞えます。主基殿の神樂舍からですが、主基殿は左側に設けられてあるのですから右の幄舍の私達からは悠紀殿よりは一層奥深くなつて仕舞うて、運ばせらるゝ御親祭の御様子は一切判りません。併し判らない丈それ丈、床しい、尊とい、聖いものでありました。遠き御先祖の神靈が灑ぐ聖水の雫の音が、

ともすれば神境に入らんとする私達の耳を洗ふ。私達は合圖の電燈によつて、起立もし、着席もする丈ですが、其都度、夜を徹して細心の御親供をされる　聖上の御心勞を拜察するのでした。

御代祝ふ心こめつゝ三上人、瑞穗の稻をつき初むらし

舂き米から始めて調理まで、全國民に代つて御飯御粥を始め黒酒白酒くさ〴〵の御饌を供進せられ、報本反始の實を示し玉ふ其御心情、日本の米を食むて活きてる私達、其私達の祖先と、私達の子孫とを、縱に横に考察する外、暫くは其處に、時間もなく、空間もなく、寒暖もなく、明暗もありませんでした。

◇三時十分、御式を終つて幄舍から退出すると、雨は尙降りしきつて居る、係りの式部官がかざす傘の下を潛つて、朝集所に行て一服すると、曉の御膳が列んで居ます。溫かい松茸の御飯や、ふさはしい汁などを頂戴して、朝集所を出たのは四時五分、紫や、黄や、紅や、綠のヘツドライトが都大路に漂ふ雨水に映じて五色の帛を曳きまはすのでした。ヘツドライトの色は、皇族、親任官、外交官といふ樣に區別されてあるので、出入共に其區別

に從つて、御門を異にし番號順によつて動かされるので、一糸紊れざる秩序は亦皇國の大理想だと思ひました。

〰〰〰〰〰〰〰〰

庭燎(にはび)焚(た)く白衣の火炬(ひたき)手の裾の丹(に)な紅葉かと見る仙洞御苑。

神といふものに近つく我なりき、齋火(いみび)に光る砂をふめるは。

いさごかも、勿体なしや我ふむは、地上のものと思はれなくに。

神秘てふことを初めて知り得たる大嘗祭の夜の雨かな。

砂をふむ音かたゝしは小忌衣、淨めの雨にふゝる雫か。

更闌けし大嘗祭に勵けるは、脂燭の炎と淨めする雨。

大饗第一の御儀

大甞祭の夜は明けて、十五日は終日雨降りでした。私は宿に歸ると直ぐに床に就て、十時頃迄眠りを貪つて、午後には一代の豪奢を示すとまで噂された住吉の久原遞相の園遊會に招待されて居たのですが、夫も辭退し、私と同じ樣に寝すごして汽車の時間に間に合はずなり、住吉まで自動車を叱り飛ばして行く人を餘所に、只管休養して居ると　陛下には午後から京大の教授を御召しになつて、講演を御聽きになるといふ新聞記事を見て、感奮もし、新　大帝の旺盛なる御精力に絶大の歡喜を覺えるのでした。

◇嚴粛に緊張した夜はすぎて、喜びと祝ひの色に滿ちた十六日の空は美しいものでした。遇ふ人といふ人の顔が輝いて居ます。街には賑やかな鳴物も聞えます。私は午前十時に仕度を整へて例に依て三木檢事長の宿舍に自動車を驅り同道して第二朝集所に參入すると、驚く可し、休所が全く別の世界になつて居ました。天井から吊されたシャンデリヤ、壁に飾られた緞帳は云ふに及ばず、白木の板を打付けた長卓は取除かれて、美々しい房を垂れた卓子掛の下に蠟塗の脚、金色の金具が見えます。白木綿の長布團の腰掛は流行模樣の緞子張りの肱掛椅子に仕換へられ、大輪の菊は卓に咲き誇り、刺繡の牡丹は衝立に匂ふて、全く御伽の國に來た樣です。時が來て、係り官が、御案内といふて正面の扉を開けて呉れたので、御廊下に出ると、燃える樣な緋の絨氈が御饗宴場につゞいて、鉢植の菊が兩側に研を競ふて居ます。

◇唯見る絢爛を極めた龍宮殿、陪觀の席でもあり、御饗宴を賜はる席でもあるところは、凹字形に設けられて、兩側は群臣の席、正面は申すまでもなく　兩陛下の玉座で、其前に皇族席、外國使節の席があります。中央には平安朝の豐樂殿を象どつた舞樂殿が設けられてありますが、其間は硝子張りの天井で、屋根の廂を見せ、舞樂殿は全く屋外の氣分に作られてあります。朱欄黄飾して紅紫の華彩を施し、壇上には赤氈を敷き、玉座に對する後ろ側には十數尺の高さの二巴と三巴の模樣ある火炎太皷が二つ並んで居ます。壇の周圍には海老色の天鵞絨らしいもので蔽はれて弦月形の長椅子が幾つか取つけられてあります。

◇各員の卓には、白木の折敷が三つあつて、純日本式土器盛りの式膳と磁器盛りの饗膳二

つとが列べられ、左手には小さな島臺を飾り、右手には豫て聞く銀製梅竹の挿華(カザシ)が電光に映えて居ます。宮中席次で參入すれば、其席順にチャンと官職氏名の席札がつけられて在て、何の世話もなく定められた席に着けるのですが、眩しき許りの光りの中に迷ひ、係り官に尋ねては徐かに腰を下ろすのでした。其内警蹕の聲して、　兩陛下には皇族方を隨へさせられて出御あらせられ、今尾景年畫伯のものされた千年松山水の錦軟障＝民間で云ふ衝立を宮中では御障子と申す樣ですが之は幕の一種ですから軟障と申すのでせう。＝を後ろに、川合玉堂、山元春擧兩畫伯の描ける悠紀主基地方の風景畫の御屛風を横にして、大饗盤に御着になりました。頓て御聲淸らかに　勅語を賜はりたる時は、恐れながら天上の美しい星が百華の中に下り立たせられて、物言はせ玉ふかと思ひました。群臣を代表する田中首相の奉答に次で、獨逸大使ゾルフ氏が、極めて敬虔の體度で外國使節を代表して、御祝を申上げられました。夫が畢ると金衣丹袴の式部官が、黑酒白酒をたてまつり松菊の銀の挿華を捧げまつる。同時に同じ服裝の係り長が素燒の酒瓶を左右に一つ宛捧げ來て賜はる所の黑酒白酒を注いでまはられます。今夕の大饗には大體大甞祭の御儀に參列を得た

者だけ召された次第がよく判明します。夫ですから、式膳には昔ながらの質素な土器製の杯が二つあつて其外に、雪白の御飯、汁物、昆布、鳥肉、魚肉など祝肴が何れも土器に盛られてあります。他の二つの折敷には、別に磁器製菊花模樣の大盞、皿碗等が置かれてあり、醪の樣に濃厚な黑酒白酒のあとには、芳醇無比の溫酒を賜はるので、私の隣の某大學教授などは、嘆美絕賞して、私が御酒を拜辭して居るのを見て、夫は御氣の毒だと同情の聲さへ洩されました。左程に言はるゝならばと、私も數滴戴いて見ると、正に特製の月桂冠でしたから、其旨を耳語すると、教授は目を丸くして、夫が判りますかと今度は最高の敬意を私に表するので、笑ひを忍ばずには居られませんでした。

◇いつの間にか嚠喨たる和樂の音が火炎太皷の蔭から響き初めました。其古しへの道臣命や大久米命が見えしかと思はるゝ武人が現はれて、雄々しくも舞ふのでした。是こそ　神武天皇東征凱旋の舞で、久米舞とやら、歌詞は御製ときくだに畏く、古雅典麗其ものでありました。みこと等退出して、程なく悠紀主基地方風俗舞があります。

高御座のぼらす年の喜びをしるし留めよ水莖の岡

といひ、

うち渡すいきの松原いき／＼と榮えむ御代の色ぞ見えたる

と歌ふ詞と振と、まことに郷土舞そのものであります。風俗舞がすんで、一段と優婉な演奏が舞樂殿に漂ひますと、銀扇をかざした天津乙女が、しづ／＼と殿上に見えます。問ふまでもなく、五節の舞です。つぎ／＼に五人の舞姫が壇に上ると、控への姫達は、同じ衣裳して階段の下に半身を見せて居ました。

少女子がおとめさびすもからたまをたもとにまきて乙女さびすも

天武の帝、吉野瀧の宮に行幸の砌、日暮れて御琴を彈じ給ひしに、神女山岫に現はれて、御琴に合せ舞ひしとはまことか、歌は春水流るゝ如く、舞は春風誘ふが如く、樂は春禽囀るが如し。愛度かな。昨は瑞穗より得たる酒饌を神靈に供せられ、今は頒つて臣民と偕に祝はせ玉ふ。聖恩天の如く地上百草萠ゆるの偉觀と申すべし。

折敷の一つは容器のまゝ拜受することを許されて居ますが、其他は、卓に用意してある折疊みの紙折と風呂敷とを利用して納めねばならんので、私は隣りの教授が頻りに

月桂冠を敬賛して居る間に、島臺や金銀水引で姿勢を正して居る鯛などをいかに整理すべきやを、私かに研究して居ました。そうして温い味付の御飯や野菜の汁などを戴いた後、徐かに其整理に着手すると、教授先生も周章てゝ私の眞似をするのでした。

◇再び警蹕の聲して　陛下入御あらせらるゝを待ちて、一同は大きな風呂敷包みを兩手にして、饗宴場を出て元の休所に戻りました。紫に漂ふ煙草の烟の中にさまよふ金色の菊の飾りと、ほの白い本當の菊とが、小春の蝶を迷はせはすまいかと思ふばかりでした。暫くして、思ひ／＼に格好の悪い大包みを提げて退出する。乘用の自動車が順よく待て居ますが、運轉手が御荷物を受取らうとすると、包みの中が不安なので、重いけれども手を移すことは叶はず、兩手で大事に釣つたまゝ、車の中で、先刻拜觀した舞の手を學んで居る向もありました。

○

たぐふべき何物もなし、聖代の光眩しく五節舞觀る。

○

京雛は妙なる笙の音にひかれ、乙女さびすもと舞納めけり。

○

光は滿てり、銀の挿華の梅竹の枝にも葉にも小さき花にも。

○

我胸の金色の飾りな愧つるかな、白酒黒酒は古しへのもの。

大饗夜宴の御儀

◇十六日の宵から、洛中の賑はひは非常なものでした。囃し立てる笛太皷、踊りまはる人の群、紅火の陣を曳く提灯行列、乃至夫等を見物する老幼おしなべて、平和と祝福の形象でありました。必しも享樂の歡びではなく、神國の色どりでありました。夫は無論其翌日まで續きました。十七日には、午後六時半から大饗第二日の儀が行はれて、親任以上の人達と其夫人とが召され、午後八時から、夜宴の儀に、御即位式參列者全部が召されたのはまことに　聖旨の至大至高なる所以かと考へるのでした。

◇私達は、夕刻迄に仕度を整へて、最終の御儀式參列を無事に了すべく出て行きました。私達の下衣とヅボンが黑に變つたのと參列者の數が三倍になつた外昨日と違つた處はありません。違つた處はない筈なのに意外な手違があつたことは特筆せざるを得ません。參入の時間が迫つて來たと思ふと、係り官が朝集所の横の入口に立つて、けふは別に席次を定めてありませんから、隨意に列を造つて參入する樣にと注意を與へて腕時計を見て居ます。

各員は此所から出て行くことかと、豫じめ其所に行列を作るのでした。昨日は正面の扉から出たが、何かの都合で出口を變へたかと私達も附和隨行せざるを得ないのでした。更に不思議なことは、豫定の時刻になつても、一向參入の通告が來ない。是まで一度も時間の勵行されないことはなかつたのに、ドウした事かと尋ねたところで、誰も答へられる者はなく、其内二十分をすぎ、三十分を過ぎて、何の知らせもない。立ち疲れた人の間に、いろ〳〵の想像說も出たが、約五十分遲れるといふことを聞て、兎も角も順位を拋棄して暫く腰を掛けやうといふ樂觀の人もあれば、多少不安の色を示して一歩宛も先へ進む人もありました。其內遲刻の理由が、肩から肩へ傳へられました。夫は、さなぎだに洋食に馴れない令夫人達が、袿袴の服裝でシカも高貴に咫尺した爲め、ナイフ、フォークの扱ひ意の如くならず、一皿毎に餘分の時を費した結果だといふ事です。いかさま、一切の豫習を行ふて時間を定めたのではあるが、夫人達の飲食の豫習はしなかつたに相違ない。夫にしても夫人達の失態だといふ批難もあれば、ソコに日本の婦人の美德があるとの辯護もあり、其可否は何れにしても、かく迄遲れると、私の樣に夕食をたべずに來た者は、淺ましいことながら夫人達を恨まずには居られません。加ふるに愈參入を願ひますと云ふ聲は、意外にも矢張正面の入口に聞えたので、横口に立つて居た者は皆不覺を取つた譯です。

◇豫定より約一時間をすぎて、一同は舞樂陪觀席に着きました。大饗第一日の御儀の折、空席になつて居た舞樂殿の周圍と、當時の饗宴席が、今夕の陪觀席なので、之に三千の人が這入るのですから、其大部分は立つたまゝで、後ろの方は身動きも出來ない樣です。其前に、美しい色と芳くはしい香と、なまめかしい肌とを、外國の若い婦人達が其本國の光りの如くに浮かして居ました。スチームと滿員の人いきれもありましたが、中には天狗の繪に見る樣な大きな羽子の扇を披げて、牛肉の脂の樣な胸のあたりを煽いで居る向もありました。最前の御饗宴で、豫定の時間を狂はしたと云はれる私達の小母さん達は、此處彼處に小さくなつて居ました。

◇　兩陛下を始め、皇族同妃殿下の御着席を迎へて、萬歲樂と太平樂の舞樂が演奏されました。前者は文の舞、後者は武の舞、一は閑雅優美で、一は雄壯華麗、地に曳く裳は彩雲の如く、頭に戴く鳥形の冠は空飛ふ靈禽の如く、矛を操る手先は陣を衝かん斗り、劔を揮

ふ腕は敵を居らんきほひです、そうして其原動力でもある様に、唯殿上の飾りとのみ解して居た大きな火炎太皷が太やかに響いて、或は陰或は陽、異國の人さへ驚異の眼を張り、嘆美の耳をそばたてるのでした。

◇　兩陛下には始終にこやかに、而も端然として舞樂を御覽あらせられる。秩父宮同妃、高松宮の各殿下が、御睦しげに何事かさゝやかれては互にうなづかせられる。全國の內裏雛を蒐め、世界の美しい人形をとり寄せて、一堂に飾つてもかくまではと思はれます。

◇舞樂が終ると各員は一應休所に退き、しばらくは休憩を許されました、十一時半頃又元の入口から御饗宴場に參入しました。舞樂陪觀席の背後にあつた壁代(カベシロ)の幕が撤せられて、此所に食卓を列ねた大廣間が展開されました。親任以上を除いては皆起立のまゝ卓に就くので、御献立は洋式でありました　兩陛下の出御に際して、君が代の吹奏があつて、引續き軍樂隊が名曲を奏するのでした。優秀の樂手が心をこむる藝壇の譽れ、妙なる旋律淸らに澄み、いみじき音波なごやかによすれども、夜は更けたり、腹は空きたり、フォークの動きむしろせはしく、舌皷の音却て高きは淺ましいことでした。中にも、我同列の一人が

いつの間にか帶劍の吊紐を千切つたことに氣附かず、卓に着てからはドウにもならず、片手に劍を抑へ居る爲に、皮をも剝がずに果物を頰張りたる如き、或はしたゝかシャンパンを拜味して記念の大事なボンボニールを、すんでの事忘れて行かうとしたなどは、盛宴の餘興として殘る話であります。

君が代の樂音再び起つて各員齊唱、玆に目出度御開きとなつたのは十二時三十分頃でした。休所にて賜はる恩賜の煙草を頂戴し、銀製黑木燈籠形の記念品を捧持して御門を出たのは午前一時でした。いかばかり御滿足に思召されて、御安き眠りには就かせ玉ふらんと恐察しながら宿に歸ると、みんな起きて居て無事に參列の任を終へたことを祝ふて吳れます。何處やらに鷄の啼く聲がします。

○

大饗宴（うたげ）、
極彩色の
いみじき中の、
小さき繪の具と
我もなりしか。

○

丈六の
火炎太皷も、
御前にて
萬歳樂と
打ひゞきけり。

後記

◇すべての御儀式は何の御障りもなく運ばせられました。御同慶の語は、あまりに月並ではありますが、外にふさはしい言葉を知りません。陛下は國民の赤誠によつてと仰せられたかに承りましたが、そは洵に御謙辭で、陛下の御稜威によると申奉る外ありません。併し、一般國民就中京都市民が、極度の熱誠を以て祝賀の意を表したことは、爭はれないものでした。京都市では、共翌十八日を以て、植物園に空前の大園遊會を催し、嘉肴山の如く芳醇泉の如く備へ、近古現代の粋を拔いたいろ〳〵の趣向を凝らし、三千の會衆をアツといはせましたが、市當局は夫でも、溢るゝ喜びを表はすに足らぬかに思つてる樣でした。私達參列者に對しても、心から歡待の極を致された態度は、蓋し參列者を通じて、敬謝したことであらうと思ひます。私の知つてる範圍で、宿舍の苦情をいふ人は一人もありませんでした。時に或は、僕の宿舍には困るといふ人もありましたが、事情を聞くと、餘りに歡待されて恐縮してるのだといふのでした。若し萬一にも、何處かで聽た風評の如く、

宿舍を拒まれたり、宿賃の前拂を請求されたりした向があつたとすれば、＝多分誤聞だとは思ひますが、＝夫は餘程タチの惡い仲間で、或は大正度の御大禮の際、宿舍を懲りさせたのではないかと考へざるを得ません。京都市民にも恐らく批難の餘地はありませう。中には感服出來ない人格もあるらしいです。併し　皇室を尊崇することに於ては、全く他の追隨を許さない處があると私は思ふ。夫ですから、特別の懇意だとか、大官だからとかいふ意味許りでなく、御大禮の參列者だからといふので、特に注意をしたといふ事は爭はれない樣です。我藤井氏の宅で、御馳走といふよりは衛生的に旨いものを選ぶに苦心されたことを食事の都度味ふことを得たのも其一つであります。十四日には大嘗祭の參列と聞て特に餅をつかせて、主人自ら沐浴して炙つて呉れて汁物は一切下さらない位でした。

私が京都に乘込む前の事ですが、大阪の金山檢事正の御宅へ、警察官が行つて、御家族から女中さん迄健康診斷をすると申渡したので、金山氏の御宅で頗る面喰つたといふ珍談もあります。筋はかうです。大禮使の方から警察へ、高貴の方が金山氏方へお泊りになると通知があつたので、早速警察から出かけたのだそうですが、金山君一向

高貴のお方のお宿を御引受けしたこともなく、勿論同氏の官邸がさうした方をお泊め申す樣な適當な家でもない。ドウした譯かとアチコチに問合せて始めて大阪は大津の間違で、其大津の檢事正官舍へ、我吉益檢事長が泊ることの屆出によつたものであると判りました。吉益君は堂々たる高等官で、私達も貴君など〻敬稱はするが、高貴とは驚かされたと金山君の說明でした。一班が是です。夫だからドコの宿舍へも毎日の樣に警察官が出向いて、食器の消毒から獻立まで八釜しく督勵したといふ事ですが、

京都では夫が全く無用であること程參列者を過したのでした。而して夫が　皇室尊崇の念から來たと私は信ずるのです。

◇十九日の夜行で、京都から東京にむけて歸る列車で、私は高松宮殿下と同車の榮を有しました。其車中で、宮殿下の御附武官が同じ樣な事をいはれたので、私は京都の人は、恐れ多くも　陛下をおらが天子樣とする程お親しみを有して居ます。私は先年京都地方裁判所に職を奉じて、下立賣御門から堺門御門への御苑を毎日横ぎつたのですが、八瀬大原あたりから出て來る女人夫であらう、些の綏怠もなく、忠實に掃除をする態度に敬服しまし

た。夫は實に監督の有無によるのではなく、おらが天子樣の御庭に、落葉の一つも殘すまいと云ふ殊勝なものです。之はむしろ二重橋外では見られない圖であります。と話をすると、御附武官は夫で判りました。實は先日　宮殿下の御供をして修學院離宮に參りました處、苑内の掃除が行屆いて居るのに感服しました。御聰明の　殿下には早くも御氣付になつたものと見えて、此庭の掃除には何人位の人夫が從事するかとの御下問で、係りの者が三十人と御答したと思ひますが殿下は三十人？三十人！と獨語されて何かヒドク御感じの樣でしたとの話でした。併しかうした京都の空氣は全國的であらねばならんと思ひます。昭和の新帝を擁する新國民の心裡に漲るものであつて欲しいと思ひます。交通の整理以外に御警衛に備ふる警察官を要しない樣にしたいとは、私一人の熱望ではないと思ひます。併しさうした熱望を充たすべく、むしろ自ら省みなければならない人達が、私以外に倘澤山ありはしまいか。血氣に驅られて進路を誤る靑少年あらば、そはむしろ憐むべし、靑年を指示し、國民を善導すべき世の爲政家、等、等、等飛んだ處へ記事が脫線しました。

◇私は無上の幸榮と滿悅とを荷ひ、いろ〱の貴重の記念の品を納め、せめては其外形丈

も老いたる母や、家の者に示して、共喜びと幸とを頒つ可く、大饗第一日の御儀の饗饌の一部をも携へて京都を引上げたのですが、玆にモウ一つ、知人や家族達に示したい土產がありました。夫は我藤井君が、年來の社會奉仕的努力が　天聽に達して、前に記した如く又なき機會に特に叙勳の光榮を有せられた事です。同君と別懇の關係上、私は必しも私情を以て同君を祝福する譯ではない。私は職掌柄先づ其證據を擧げます。

藤井君のお宅の床の間に一幅の掛物があります。之は同君が家寶として子孫に傳ふる唯一のものだそうでありますが、極めて力强い筆で、一文字があります。其一の字の兩端に点が打つてあつて、其上に左の贊があります。

藤井音次郎翁壯時携一條擔子辛苦幾乎三十年、終見齊家治國之功、官錫紺綬及藍綬褒章而未曾倦怠、盞一條棒頭擔起天下者也、且道這箇力用什麽學來堪人龜鑑、山僧爲描一棒贊焉。

面目彰々日月悠、櫛風沐雨共吾儔、
如今招起懸牀上、報答四恩卒不休。

昭和二晩秋　　　　　　　金閣故光

いふ迄もなく、一の字に似たものは天秤棒で、藤井君が壯年時代奮闘の歴史を語るものです。藤井君は實に其昔を忘れず、忘れざらしむべく、金閣寺の老僧を煩して、かくも描て貰ふたものです。而も其表裝の天地の一文字は、三十餘年前藤井夫人が嫁せられたとき纒うて來られた帶の一部で、周圍には藤井君自身が着用したアツシの切れを用ひた上、軸には乾物商時代の衡の竿が使つてあります。

かうした覺悟と苦闘の下に、藤井家は一かどの產を成したのであるが、自己の生計と子孫の生計に足る丈の用意を除いて、其餘剩は勿論、腕と頭の力を社會奉仕に充てやうと奮起したものです。而して、其重責と勞苦とに比してあまりに薄遇である所の警察官に目をつけて、大正八年には京都府警察官後援會を發起し、卒先して資金を供し、奔走經營今日では四十萬圓の基本を有する立派な法人になつて、京都府下の警察官の大事な小父さんになつて居ます。次で大正十二年には、同じ考慮と、同じ苦心の下に消防協會を組織し、矢張其頃刑務所を參觀して、刑務官吏の境遇に同情することの遲かりしを叫び、日夜の奔走空

しからず、十餘萬圓の基金を作つて輻堂會と稱し、刑務官吏と其家族とを安んぜしめました。今度の御大典に際し、京都の市の奉祝會の企てを開くと、市長室で先づ自ら一萬圓の出金を申出で、市長の專用電話を使つて、立どころに十一萬圓を集めて市長を驚かしたといふ事もあるそうです。いつも此式であるが、夫が爲め同市では今回百八十萬圓の巨額を容易に集め得たといふ事です。曾ては誤つて＝藤井君はいつも「誤つて」と云ひます＝市會議員にもなり、銀行會社にも關係されたのですが、其後一切さうした方面には振向かず、學區の學務委員として非常な盡力を試むる外には、裁判所の借家借地調停委員、小作調停委員、商事調停委員を何よりの重職と心得て、勞を吝まず、累を顧みず、其方面の勳績は實に偉大なものです。私は京都の所長として在職中、心からの謝意を表すべく感謝狀を贈つたのでしたが、爭議の當事者たる地主や、小作人からも感謝狀が澤山來て居ます。事司法省に聞えて、去昭和二年十二月、司法大臣から表彰狀と銀杯を贈られました。丁度夫が同君夫妻の銀婚式祝賀の際であつたことは、ドレ程同君と同君を圍繞する多數の知己を喜ばしたことでせう。先是、勳績により藍綬紺綬の襃章を授與されたことは、老僧の贊にも

ある通ですが、今回更に勳六等に叙せられた譯です。同君は勿論夫人や令嬢に至るまで、歡天喜地、天恩に感激して益國家の爲めに努力したいと誓つて居られました。

◇血潮と汗とによつて築かれた藤井君の經歷は眞に一の大きな修養訓であり、眞摯にして奇警な君の物語を聽くことは、確かに一の大きな學問でありました。私はいろ〳〵の意味に於て、永く記念すべく、同君に勸めて、其清き光ある勳章を帶びしめて、同君が地方饗僎に與つた大饗第一日の儀の當日、同宿の宮脇知事並に藤井家の家族と共に撮影して、其寫眞を家苞の中の大事なものとしました。本書の卷頭に掲げたのが夫です。

終

司法部の御大禮參列員

司法大臣	原嘉道
政務次官	濱田國松
次官(大禮使參與官)	小原直
參與官	磯部尙
民事局長(大禮使事務官)	池田寅二郎
刑事局長　(同)	泉二新熊
書記官(典儀官)	佐々木良一
同　(同)	清水壯左久
同　(同)	大原昇
同　(同)	長島毅

秘書官（同）　麻枝房吉

大審院長　牧野菊之助

檢事總長　小山松吉

大審院部長勅一等　豊島直通

東京院長　和仁貞吉

同檢事長　三木猪太郎

大阪院長　谷田三郎

同檢事長　大田黑英記

名古屋院長　立石謙輔

同檢事長　皆川治廣

廣島院長　今村恭太郎

同檢事長　南谷知悌

長崎院長　中西用德

同檢事長　光行次郎

宮城院長　石井豊七郎

同檢事長　吉益俊次

札幌院長　成田惟忠

同檢事長　安達峻三郎

京都所長　遠藤武治

同檢事正　古賀行倫

勅任同待遇者總代（賢所大前儀紫宸殿儀賢所御神樂儀參列）

書記官　木村尚達

同　近藤三郎

技師　山下啓次郎
大審院部長　板倉松太郎
同　嘉山幹一
同　須賀喜三郎
大審院判事　堀榮一
同　西川一男
大審院檢事　林頼三郎
同　矢追秀作
東京所長　田中右橘
同檢事正　塩野季彥
大阪所長　荒井操
同檢事正　金山季逸

名古屋所長　渡邊一郎
同檢事正　吉良辰次郎
廣島所長　伊藤久次郎
同檢事正　古森幹枝
長崎所長　三浦順太郎
同檢事正　内田司馬彥
仙臺所長　淺沼彥一郎
同檢事正　豐田多三郎
札幌所長　矢野愼治
同檢事正　男庭善之助
横濱所長　横山鑛太郎
同檢事正　竹內佐太郎

神戸所長	東亀五郎
同檢事正	田中昌太郎
浦和檢事正	奥村靖
熊本所長	下山英五郎
靜岡檢事正	鱸重康
大分檢事正	遠藤恭三郎
靜岡所長	柏木五百次郎
豐多摩刑務所長	有馬四郎助
大阪刑務所長	坪井直彥

奏任總代（同）

書記官	鬼頭豐隆
東京控訴部長	赤羽熙

東京地方部長	豐水道雲
同檢事	松阪廣政
大阪區判事	齋藤三郎
大阪地方檢事	戌亥忠一
京都地方判事	淺沼猪助
京都區判事	大野惠眼
同檢事	山口龍作
京都刑務所長	飯田高朗

勅任總代（大嘗宮儀參列）

行刑局長	松井和義
大審院部長	島田鐵吉
同檢事	溝淵孝雄

東京控訴檢事　岩村通世
大阪控訴部長　前澤幸次郎
大津所長　大久保與三吉
同檢事正　宮崎國吉
福岡所長　長谷川菊太郎
同檢事正　寺島久松
奈良所長　久保田美英
同檢事正　加藤治之丞
安濃津所長　松田孫治郎
同檢事正　茂見義夫

奏任總代（同）

大審院判事　水口吉藏

休退職者（親任同待遇）

前大審院長　富谷鉎太郎
同　横田秀雄
前大審院部長　馬塲愿治
前長崎控訴院長　手塚太郎

賢所大前儀紫宸殿儀賢所御神樂儀參列

判事　磯谷幸次郎
同　山内確三郎
檢事　黒田英雄
判事　高橋文之助
檢事　寺島小五郎
同　川淵龍起

検事　大倉鈺藏

大嘗宮儀參列

判事　能勢萬

同　遠藤忠次

検事　阿野義彰

昭和四年四月十五日印刷
昭和四年四月廿六日發行

著作兼發行者　長崎市八百屋町三三　石井豐七郎

印刷人　長崎市榎津町七　藤木喜平

印刷所　長崎市榎津町七　藤木博英社

（非賣品）

323
23

終